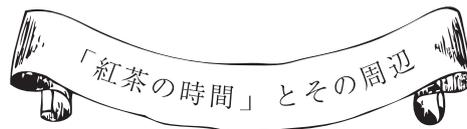


# きもちは、 言葉を さがしている



## 第13話

水野 スウ

### 30年目の「紅茶の時間」

週に一度、家をひらいての「紅茶の時間」は、今年でちょうど30年。だからといって、何かとくべつなことをしよう、とまったく思わないところが10年前の自分とは違うなあ、と感じています。

毎週必ず誰かしら来てくれたから続けてこられた、紅茶という場。とくべつなことは何もしていない、ということをしてる場所だけど、それこそが紅茶の身上なんじゃないか、と、ここ2、3年ますます思うようになりました。

常日ごろ、あれやこれやの“すべきこと”に追いまくられているような気のしている人たちが、ここへやって来て、何も要求されずに、そのままの私でいいんだ、って勝手に感じることに、そういうきもちや空気を体験すること。それもまた、今の紅茶の役割の一つなんだろうな、と度々思います。

これまで紅茶の時間の周辺についていろいろ書いてきたけど、今回は、ふつう紅茶の記憶のアル

バムから、その何頁かをふり返らせてくださいね。外から特別ゲストがくるわけでなし、ときめきのドラマがくりひろげられるわけでなし。それでも私にとって、紅茶は毎週おもしろい、そのあたりのことを。

### 紅茶一杯分のKさんの介護休暇

最も古い紅茶仲間の一人、Kさんとの出逢いは、紅茶をはじめの前。彼女がバスガイドの卵さんだった頃、その研修先でのことでした。

Kさんは結婚後、すぐに出産。ガイドの仕事をやめて、二人目が生まれる直前、というタイミングで紅茶がスタートして、それ以来の常連さんです。私に娘が生まれ、一緒に子育てする仲間がほしくてはじめたのが紅茶だったから、彼女と私、年は一まわり近く違えど、互いの子育て時代が、紅茶の歴史ともあわせてほぼ重なっている、というわけです。

舅、姑、小舅さんたちもいる大家族の中の、長

男のお嫁さんであるKさん。ほかの家族は日中は家にいないとはいえ、幼子二人の子育てと大所帯の毎日の食事づくり。

持ち前の前向きの明るさと素直さで、彼女がその家族から愛されてることは話のはしばしからうかがえたけど、それにしてもこの若さでよくやってるなあ！といつも感心していました。私にはとても出来そうもないことだったから、余計に。

その頃のことをKさん、「jeeちゃん、ばーちゃんにもよくしてもらってたけど、あの時期、週に一回、子連れで堂々と家をあけられる、家族公認の場所があるってこと、私にとって本当に救いだったんだよ」と言っていました。

子育てが一段落してからは、ばーちゃんに協力してもらいながら、Kさんは大好きなバスガイドの仕事に復帰して忙しくしていたそうです。当然紅茶へは足が遠のく、それでも何年かしてふっと、「やっぱり自分には紅茶が必要！って思ってる」と、彼女はいつの間に再び、旅のガイドをしない水曜日に、紅茶によく来るようになりました。

それからまた10数年がたち、舅さんであるjeeちゃんの認知症がだいぶ進んでからだも弱って来た時、家族会議の上で出した結論は、施設でなく、できるかぎりこの家でjeeちゃんを最期までみんなで見よう、でした。その中心になるのは、ばーちゃんとKさんだけど、足りない所はヘルパーさん、地域で在宅医療を応援し、往診もしてくれるお医者さんに助けてもらいながら。

ガイドの仕事を入れず、jeeちゃんの在宅介護に専念する日々のKさん、それでも紅茶にはひんぱんに来ていました。介護の要支援度があがるにつれて、彼女の在・紅茶時間は短くなって、最終的にはほんの30分だけ。行き帰りの時間をふくめて、彼女が家をあけられる時間の長さが、文字通り、紅茶一杯分。彼女はそれを、「私の介護休暇」って呼んでいました。

それから数ヶ月後。ひさびさに紅茶に来たKさんが、その日はなぜかずいぶん長居しています。今日は長く居ても大丈夫なの？と訊いたら、K

さんは晴れ晴れとした顔で、「おかげさまで、jeeちゃんを見送りました。いい最期やったよ」。

それからだいぶたった日の紅茶で、Kさんがしみじみと言ったこと。

「私ね、ほんとに紅茶があったから、やってこれてん。ここで一週間分のストレスをリセットしてね、よし、またがんばるぞ〜。そうやってあの時期を乗り切れたんだよ」

ここに来れば、自分がせいっぱいやっていることをよく承知してくれてる人たちがいる、ということ。それが、彼女にとってはこちらが思う以上の、大きな支えだったのかもしれない。

お茶一杯の介護休暇中のKさんに、仲間の誰一人、がんばってね、なんてことさら言わないところがいかにも紅茶らしく、それもきつとうれしいことだったろうな、と思う。一杯のお茶の時間がこんなふうには誰かを、確かに救うこともある、そう気づかせてもらえたことに、こちらこそ、感謝、でした。

そうそう、介護中ですら水曜になると、「ばーちゃんが、今日は紅茶いかんでいいが、って言うてくれてた」そう。そういう関係性を築いてこられた彼女がすごいと思うし、家族の他のメンバーも次つぎ、介護の助っ人に巻きこんでいって、最終的には家族の誰もが、jeeちゃんのお世話を自分もできた、と思えるようにしていったところが、なんともすばらしい。

そのことが、筆まめな彼女の介護日誌「jeeちゃん日記」を読ませてもらってよくわかりました。jeeちゃんの体調、したこと、言ったこと、ドクターの診察、ヘルパーさんのアドバイス、家族の応援、などを細かに綴った「jeeちゃん日記」は、大学ノート6冊にもおよび、そのノートは今も、家族の介護が必要になってきた紅茶仲間の間を、ぐるぐるとまわっています。

## Fくんの1年目のあいさつ

今からもう6、7年前の春。電話口から、「あの〜、僕、紅茶に行きたいんですけど……」と若い男の子の、くぐもった声。

「はい、どの水曜日でも1時からあいてますよ。ちっともはやってなくて、特別なこと何もしてないけど、それでよければどうぞ」と言ったら、早くもその翌週にやってきたのがFくんでした。ゲゲゲの鬼太郎みたいに、前髪長くたらしめたヘアスタイルで。

幸か不幸か、そのお初の日に限って、紅茶はめちゃめちゃ大はやり、人でいっぱい。Fくんにしたら、私から聴いていた話と全然違うし、おおいにひと疲れもしたろうし、これに懲りてきっと彼はもう来ないだろう、と思っていたら、翌週もその翌週も、彼は紅茶があくと同時にやってくるようになりました。はじめは電車をのりついで、やがて、交通費が高くつくからと、途中からは50ccバイクに乗って1時間余りもかけて。

あいかわらず長い前髪で、ほとんどの時間うつむいている彼が、いったいどんな顔をしているのか、私にも初めのうちはよくわかりませんでした。あまり人と話さず、私とも必要最小限しか話さず、たとえたらまるで岩みたいに、じっとそこに居ることが多かったFくん。

それでも、初訪問の日から半年目くらい、床屋さんに行ったとみえてござっぱりした頭でやってきたその日、彼がとてもかわいい顔をしていることに、そしていい表情していることに、私ははじめて気がついたのでした。

たまにぼつり、と話す彼の言葉から、最初は、紅茶に来たら何かしてくれるだろう、というあわい期待を彼なりに抱いて来ていたらしい、ともわかりました。そりゃ残念だったねえ、紅茶って何にもしてくれないとこでしょ？と言ったら、はい、と苦笑してうなづいてた。

そう判明したにもかかわらず、彼は毎水曜日、変わらずこの場所にやって来ました。今何してるの？学生さん？と訊いてくる人のことが苦手な彼だったけど、しだいに免疫もついたので、うまく避ける場所は避けつつ、やがて私たち夫婦や顔なじみになったお母さんとなら、少しずつ話もするようになっていきました。

それから季節が一巡りした、ある日の紅茶。Fくんが、入って来るなりきちんと正座して、あらたまった口調でこう言ったのです。

「僕が紅茶に来だして、今日でちょうど一年経ちました。紅茶は、誰にも、来ちゃいけないと言えない場所なので、水野さんには迷惑だったと思うけど、僕をずっと居させてくれて、本当にありがとうごさいました。これからもよろしくお願いします」

びっくりしたと同時に、彼は今日、これを言うつもりで来たのか！って思ったら、思わず胸が熱くなりました。そして、紅茶の、彼なりのとらえ方、「誰にも来ちゃいけないと言えない場所」という言葉にも、はっとしたのです。確かに紅茶は、仲間たちのところを傷つけたり、場の安心を脅かしたりする人でない限り、誰が来たっていい場所だものね。

「そっか〜。今日で一年！本当によく来続けたよね。すごいよ。私にはおそらくできないこと。だって誰も特別やさしくしてくれるわけじゃないし、ある意味、ほっとかれてる。そんな中ずうっと来続けたって、根性あるってことだもん。

迷惑じゃなかったけど、ちょっと困りはしたかな、だってあなたの期待に紅茶はこたえられそうにないし、いてもそう楽しくはなさそうだったもんね。だけど、髪を切ったあたりから、お母さんたちとも会話が続くようになってきたね。笑ったら、笑顔がとてもよかったね。

そういう変化を見せてくれたのがとてもうれしかった。だからこっちこそ、来てくれてありがとう、です」

てっきり、彼は不登校だったんだらう、と私は思っていたけれど、それは違っていました。とても無理しながら、学校には休まず行っていたそうです。そして大学へも行き、卒業もした。だけどその後の、社会に出る段になって、いろいろとむずかしくなってしまったようでした。

彼が何度も私に訊いたことは、

「コミュニケーションって練習すればうまくなりますか」

「練習したら、僕もふつうに人と話せるようになりますか」

彼が一年間紅茶に通い続けたのは、おそらく、紅茶が居心地よかったからではなくて、きっとほかに行く所がなかったから仕方なく、だったのだろうと思います。だけどその間、これといった練習はしなかったにもかかわらず、いつのまに、紅茶に来た人と、ふつうに会話をするようになっていった彼。

さらにはこんな発見もしていきました。

「悩んでるの、僕だけじゃなかったんですね」

「お母さんたちにも、いろんな悩みがあるんですね」

「いつも明るくて愉快的なお母さん、あの人もしんどい時があったんだ、って始めて知ってびっくりした」

黙って岩のようにただそこにいて、いろんな人のうれしい話、悲しい話を聴くだけだったあの時期も、それはそれで、彼がひととコミュニケーションをとるための助走がわりになっていたような気がします。

やがて彼はバイトをはじめて、紅茶で職場のぐちをいってはみんなで聴き、「あのきつい職場でもう半年たったんすよ〜」などと、誇らしそうに言ったりもするようになりました。

「この前、サポートステーションの人といろいろ話してたら、なんと3時間たってたんすよ」。

おー、雑談がそれだけ続くって、会話のキャッチボールができてることだよ、ずいぶん進化したんだねえ。

めずらしい顔ぶれの人が集まった日の紅茶で、時に突然始まることのある自己紹介リレーも、前は大の苦手だったけど、いつのまに自然体で自分のことを語るようになっていました。

ここ数年は、彼なりの卒業時期を迎えたのか、彼が紅茶に顔を見せることはなくなりました。だけど、紅茶が彼の人生の一通過点だったように、どこにしよう、対ひとへの免疫を少しずつつけながら、彼なりのペースで歩いていってくれるといいなあ。それが、紅茶の家主のささやかな願いです。

## YさんのSchool of Life

Yさんが初めて紅茶に来たのは、「紅茶の時間」を金沢の小さなマンションではじめたばかりの頃、なので、もう30年近くも前のことになります。

だけどその当時は、すごく活動的なお母さんたちばかりそこに集まってるように思えて、彼女はなんだか気後れしてしまい、それからずっと紅茶には足が向かなかったそうです。

やがて風の便りに、紅茶が津幡に引越したことを聞いて、何年ぶりかに行ってみたら、前とは違う感じの“ふつうの”お母さんたちが来ていて、昔みたいに混んでなくて、これなら自分に向けてそうだと時々来るようになって以来、今ではすっかり紅茶のおなじみさんになりました。

果樹園をしている農家のお嫁さんなので、作業の忙しい時期には来られなくなるけど、それ以外の週は夕ごはんの支度に関わったあまでの数時間を、よく紅茶で過ごしています。

そんな彼女は、私がお話出前の旅先からもどった紅茶でいつも、ね、どうだった？よかったでしょうね、と尋ねてくれる。訊いてもらえると私も話しやすく、思い出すまま語りだすのが毎度のこと。

ある時、「なんかここんともやもやしてたんだけど、その原因がわかったの！」ってYさんがうれしそうな顔で言いにきました。

今度行った時、きっとあの話を聴こう、あれはどうだったか知りたい、と楽しみに出かけるけど、たまたま、その日初めての人に来てたり、別の話題が先に出てたり、が重なって、ここ何回か分のお土産話を、ずっと聴きそびれてたこと思い出した。そうか、そのせいでもやもやしてたんだってわかって、ああ、すっきりした、と。

毎週のふつう紅茶で、いろんな不思議な人に出逢えること、仲間たちと本音でしゃべれることもだけど、それ以上に、家とは違う空間に週一回身を置くことが、自分にはとても大事なことだと年々わかってきた、とYさんは最近よく思うそうです。そして、まだ行ったことのない土地での紅

茶お土産話を聴くことも、それと同じくらい、自分の世界をひろげてくれる大切な機会だって気づいた、と言います。

ああ、そうだったんだね。日ごろ、舅姑さんたちと家にいることの多いYさんにとって、お土産話は心がよるこぶごちそうみたいなものだったんだね。その話から、彼女が感じたり、学ぶこともたくさんあるのだった。

それは私にしてもおあいこでした。興味をもって聴いてくれる人がいるから語ることができる。語ることで私自身、その時々の出前先で学んできたことが整理され、深められて、自分のものになっていく。学びのインプットとアウトプット。そういう相互作用のぐるぐるが、私にとっての貴重な学びなのです。

紅茶の時間のことを、私はつねづね、school of life, 人生の学校、と呼んでいるけど、Yさんにとっても私にとっても、紅茶が“学校”だと思えるのは、つまりそういうことだったのでした。

### お土産話のおすそわけ—映画「大丈夫。」

というわけで、その日の紅茶で、Yさんにしたお土産話を、ここでも少しおすそわけ。

「川越紅茶の時間」の13周年にあわせて、川越の仲間たちが実行委員会をたちあげ、1年半近くかけて準備してきた上映会、「大丈夫。～小児科医・細谷亮太の言葉」というドキュメンタリー映画のお話を。

□ □ □

映画がはじまって、最初に聴こえてきたのは、細谷先生の「私は、悲しい時に泣けなくなったら医者をやめるべきだと思っています」という言葉だった。

40年来、国際聖路加病院で小児がんの子どもたちを診てきている細谷先生。小児がんは、今では7,8割の子どもたちが治る病気になったそう。だけれども、それでも見送らねばならない子どもたちがいることも、また本当のこと。

夏、子どもたちと一緒にいく北海道のキャンプは、もう15年続いているという。病気のことを告知された時のきもちを、語る子ども。将来、何になりたい？と訊かれて、お医者さんになりたい、とか、ソーシャルワーカーになりたい、と応える子どもたち。

キャンプ以外にも、聖路加病院の診察室で、細谷先生が子どもにお話ししている場面や、細谷先生が山形のご実家の医院で診察している場面。映画のナレーターも兼ねる先生の、自然な声、語り口、そして何度も口にする「大丈夫。」の言葉。

場面が暗転し、映し出されるのは、その折々の細谷先生の俳句。それも先生の、やわらかな筆の字で。

「がんの子の おはなし会に 鬼やんま」  
「生き死二の はなしを子らに 油照」  
(夏のじりじり暑い日のキャンプ場で)  
「みとること なりはひととして 冬の虹」  
「悲しきときのみ 詩をたまふ神 雁渡」

あんまりにもつらくて、悲しいことが続くと医者をやめちゃおっか、って思いたくなる時、先生にだっておありだそう。

だけど、それではあまりに申し訳ない、なんとか続けて行こうと思う時、俳句が生まれてくる。そうやって悲しみの底からたちあがる俳句が、先生の生きていく知恵のひとつでもあるらしい。

入院している子どもたちと、先生はいつも、いいこと探しをする。

吐き気がなくてごはんたべてよかったね／昨日より緑がきれいよかったね／今日お母さんが来てくれてよかったね／点滴一回で入ってよかったね。

そうか、この先生も、ちいさなよかったを、一生懸命に探すのかあ。いいこと探しをしてると、きもちが少しずつ元気になってくる、とも言っていた。

毎日の暮らしでも、紅茶でも、ちいさなよかったを、私も仲間も、いつも探してる。見つけたら、それを言葉にして伝えあう。

映画見るまでそうとは知らなかったけど、細谷先生と私たち、おんなじことしてたんだなあ、と、その場面が、とりわけうれしかった。

15年間で凝縮された、どの場面どの言葉も、何気ないようでいて、一つひとつ、なんでこんなに心にしみるんだろ、響くんだろ。

「いのちを考えると、亡くなった人のことをベースにして考えると、本当によくわかりますよね」っていう先生の言葉を聞いた時に、あ、って思った。

細谷先生は病院で毎日、生きている子どもたちと向き合っている。だけどそれと同じか、もしくはそれ以上に、亡くなっていった子どもたちとも向き合っているんだ。

僕のこと、忘れないでね。いつも私のこと思いだしてね。もういなくなってしまった子どもたちから、そういうメッセージを確かに受けとっていると気づいてからは、もう医者をやめよう、って思わなくなった、という細谷先生。あの子たちを忘れない、ってことが僕のしごと、またそうすることで、僕自身も生かされている、と思うきもち。その哲学に裏打ちされているからこそ、医者という仕事を続けていけるのだろう。

——「大丈夫。」は、お祈りの言葉。

映画の最後に、この言葉がでてきた。映画をみてる間中、そう感じていたからなお、こころに響く。伊勢真一監督の編集も、ほんとにすばらしいドキュメンタリー映画だった。

上映後は、先生と監督による対談。こんな二人三脚トークを、もう150回もされてきているという。すかさずインタビュー役の紅茶仲間が、「そんなにできて、いやになりませんか？」ってつつこんだら、楽しそうに笑いながらの、細谷先生のお返事がなんともすてき。

「いやになりませんねえ。それは、みなさんが紅

茶の時間にいらっしゃると同じように、僕にとっての a kind of pleasure で」

お二人の息のあったかけあいトークを聴きながら、ああ、お医者さんが臨床以外の現場を持って、なんて貴重なことだろう、と思った。

出逢った子どもたちから受けとったいのちのメッセージを、ライブでくり返し語れる場がある、ということ。語りながら、先生は何度もその子たちと再会するのだろう。そして、彼らのいのちを伝え続けていくこのしごとに、先生ご自身が、きっと何度も助けられたり、支えられたりしてきているのだろう。それがまた先生の、いま病院にいる子どもたちと向き合う、あらたな力になっているような気がした。

□ □ □

以上、映画「大丈夫。」からの、おすそわけお土産話でした。

「ふつう紅茶アルバム」の続きはまた次号で。

2013.8.24